

二人がもよりの安食堂で食事をすませ、青山墓地へたどりついた時には、トツブリ日が暮れて、まばらな街燈の外は眞の闇、お化でも出さうな物淋しさでした。約束の場所といふのは、墓地の中でも最も淋しい傍道で、宵の内でも滅多に自動車の通らぬ、闇の中です。



二人はその闇の土手に腰をおろして、じつと時の来るのを待つてゐました。『おそいね。第一かうしてゐると寒くつてたまらねえ。』
『イヤ、もうぢきだよ。さつき墓地の入口のところで、店屋の時計を見たら、七時二十分だった。あれからもう十分以上たしかに経つてゐるから、今にやつて来るぜ。』
時々ポツリ／＼と話し合



ひながら、又十分程待つうちに、とろ／＼、向かふから自動車のヘッドライトが見え始めました。『オイ、来たよ。来たよ。あれがさうに違ひない。しつかりやるんだぜ。』
くと客席の人物へ、両方からニユーツと、ピストルの筒口を突きつけました。と同時に、客席にゐた洋装の婦人も、いつの間にかピストルを構へてゐます。それから、運轉手までが、うしろ向になつて、その手にはこれもピストルが光つてゐるではありませんか。つまり四挺の

案の定、その車は二人の待つてゐる前まで来ると、ギギーとブレーキの音を立てて停つたのです。
『ソレツ。』
といふと、二人は矢庭に闇の中からとび出しました。
『君はあつちへ廻れ。』
『よし来た。』
二つの黒い影は、忽ち客席の両側の扉へ駆け寄り、そして、いきなりガチャンと扉を開

ピストルが、筒先を揃へて、客席にゐるたつた一人の人物に、狙を定めたのです。

その狙はれた人物といふのは、ア、やつぱり明智探偵でした。探偵は二十面相の豫想にたがはずまんまと計略にかゝつてしまつたのでせうか。

『身動きすると、ぶつばなすぞ。』

誰かが恐しい権幕で呶鳴りつけました。

しかし、明智は観念したものか、靜かにクツションにもたれたまゝ、さからふ様子はありませぬ。あまりおとなしくしてゐるので、賊の方が不氣味に思ふ程です。

『やつつける！』

低いけれど力強い聲が響いたかと思ふと、乞食に化けた男と赤井寅三の兩人が、恐しい勢で、車の中に踏み込んで來ました。そして、赤井が明智の上半身を抱きしめるやうにして押さへてゐると、もう一人はふところから取出した一塊の白布のやうなものを、手早く探偵の口に押しつけて、しばらくの間力をゆるめませんでした。

それから、やゝ五分もして、男が手を離れた時には、流石の名探偵も藥物の力には敵ひませぬ。まるで死人のやうに、グツタリと氣を失つてゐました。

『ホホホ……、もろいもんだわね。』

同乗してゐた洋装婦人が、美しい聲で笑ひました。

『オイ、繩だ。早く繩を出してくれ。』

乞食に化けた男は、運轉手から一束の繩を受けとると、赤井に手傳はせて、明智探偵の手足を、たとへ蘇生しても、身動も出來ないやうに、縛り上げてしまひました。

『サアよしと。かうなつちや、名探偵も他愛がないね。これでやつと俺たちも、何の氣兼ねもなく仕事が出来るといふもんだ。オイ、親分が待つてゐるだらう。急がうぜ。』

グル／＼卷の明智の身體を、自動車に轉がして、乞食と赤井とが、客席に納ると、車はいきなり走り出しました。行先はいはずと知れた二十面相の巢窟です。

怪盜の巢窟

賊の手下の美しい婦人と、乞食と、赤井寅三と、氣を失つた明智小五郎とを乗せた自動車は、淋しい町淋しい町とえらびながら、走りに走つて、やがて、代々木の明治神宮を通り過ぎ、暗い雑木林の中にボツンと建つてゐる、一軒の住宅の門前に停りました。

それは七間か八間位の中流住宅で、門の柱には北川十郎といふ標札が懸つてゐます。もう家中が寢

てしまつたのか、窓から明りもさゝず、さもつゝましやかな家庭らしく見えるのです。

運轉手（無論これも賊の部下なのです）が真先に車を降りて、門の呼鈴を押しますと、ほどもなくカタンといふ音がして、門の扉に作つてある小さな覗窓が開き、そこに二つの大きな目玉が現れました。門燈の灯で、それがさも物凄く光つて見えます。

『ア、君か、どうだ、首尾よく行つたか。』

目玉の主が囁くやうな小聲でたづねました。

『ウン、うまく行つた。早くあけてくれ。』

運轉手が答へますと、始めて門の扉がギーと開きました。

見ると門の内側には、黒い洋服を着た賊の部下が、油断なく身構をし立ちはだかつてゐるのです。

乞食と赤井寅三とが、グツタリとなつた明智探偵の身體を抱へ、美しい婦人がそれを助けるやうにして、門内に消えると、扉は又元のやうにピツタリと閉められました。

一人残つた運轉手は、空になつた自動車に飛び乗りました。そして、車は矢のやうに走り出し、忽ち見えなくなつてしまひました。どこか別の所に、賊の車庫があるのでせう。

門内では、明智を抱へた三人の部下が、玄關の格子戸の前に立ちますと、いきなり軒の電燈がパツと點火されました。目もくらむほど明るい電燈です。

この家へ始めての赤井寅三は、あまりの明るさにギョツとしましたが、彼をびつくりさせたのは、そればかりではありませんでした。

電燈がついたかと思ふと、今度は、どこからともなく、大きな人の聲が聞えて來ました。誰もゐないのに、聲だけがお化みたいに、空中から響いて來たのです。

『一人人数がふえたやうだな。そいつは一體誰だ。』

どうも人間の聲とは思はれないやうな、變てこな響です。

新米の赤井は薄氣味悪さうに、キョロ／＼あたりを見廻してゐます。

すると、乞食に化けた部下が、ツカ／＼と玄關の柱の側へ近づいて、その柱のある部分に口をつけるやうにして、

『新しい味方です。明智に深い恨を持つてゐる男です。十分信用していいのです。』

と獨ごとを喋りました。まるで電話でもかけてゐるやうです。

『さうか、それなら入つてもよろしい。』

又變な聲が響くと、まるで自動装置のやうに、格子戸が音もなく開きました。

『ハハハ……、驚いたかい。今のは奥にゐる首領と話をしたんだよ。人目につかないやうに、この柱の陰に擴声器とマイククロフォンが取りつけてあるんだ。首領は用心深い人だからね。』

乞食に化けた部下が教へてくれました。

「だけど、俺がこゝにゐるつてことが、どうして首領に知れたんだらう。」
赤井はまだ不審がはれません。

「ウン、それも今に分かるよ。」

相手はとり合はないで、明智を抱へて、グン／＼家の中へ入つて
行きます。自然赤井もあとに従はぬわけには行きません。

玄關の間には、又一人の屈強な男が、肩をいからして立ちただ
かつてゐましたが、一同を見ると、ニコ／＼して肯いてみせま
した。

襖を開いて、廊下へ出て、一番奥まつた部屋へたどりつき



ましたが、妙なことに、そこはガランとした十畳の空部屋で、首領の姿はどこにも見えません。
乞食が何か顎をしゃくつて指圖をしますと、美しい女の部下が、ツカ／＼と床の間に近より、床柱

の裏に手をかけて、何かしました。

すると、どうでせう。ガタンと重々しい音がしたかと思ふと、座敷の真中の疊が一枚、スーッと下へ落ちて行つて、あとに長方形の眞暗な穴が開いたではありませんか。

『サア、こゝの梯子段を降りるんだ。』

いはれて、穴の中を覗きますと、いかにも立派な木の階段がついてゐます。

ア、何といふ用心深さでせう。表門の關所、玄關の關所、その二つを通り越しても、この疊のがんだう返しを知らぬ者には、首領がどこにゐるのやら、全く見當もつかないわけです。

『なにをボンヤリしてゐるんだ。早く降りるんだよ。』

明智の身體を三人がかりで抱へながら、一同が階段を降りきると、頭の上で、ギーツと音がして、疊の穴は元の通りに蓋をされてしまひました。實に行届いた機械仕掛ではありませんか。

地下室に降りても、まだそこが首領の部屋ではありません。薄暗い電燈の光をたよりに、コンクリートの廊下を少し行くと、岩乗な鐵の扉が行手をさへぎつてゐるのです。

乞食に化けた男が、その扉を、妙な調子でトン／＼と叩きました。すると、重い鐵の扉が内部から開かれて、パツと目を射る電燈の光、まばゆいばかりに飾りつけられた立派な洋室、その正面の大きな安樂椅子に腰かけて、ニコ／＼笑つてゐる三十歳程の洋服紳士が、二十面相その人

でありました。これが素顔かどうか分かりませんが、頭の毛を綺麗にちぢらせた、髭のない好男子です。

『よくやつた。よくやつた。君たちの働きは忘れないよ。』

首領は、大敵明智小五郎を虜にしたことが、もう嬉しくて堪らない様子です。無理はありません。明智さへかうして閉ぢこめてしまへば、日本中に恐しい相手は一人もゐなくなるわけですからね。

可哀さうな明智探偵は、グル／＼巻に縛られたまゝ、その床の上に轉がされました。赤井寅三は、轉がしただけでは足りないと思ひ、氣を失つてゐる明智の頭を、足で二度も三度も蹴飛ばしさへしました。

『ア、君はよく／＼そいつに恨があるんだね。それでこそ僕の味方だ。だが、もうよしたまへ。敵は勞るものだ。それに、この男は日本にたつた一人しかゐない名探偵なんだからね。そんなに亂暴にしないで、繩を解いて、そちらの長椅子に寝かせてやり給へ。』

流石に首領二十面相は、虜を扱ふすべを知つてゐました。

そこで、部下達は、命じられた通り、繩を解いて、明智探偵を長椅子に寝かせましたが、まだ薬が醒めぬのか、探偵はグツタリしたまゝ正體もありません。

乞食に化けた男は、明智探偵誘拐の次第と、赤井寅三を味方に引入れた理由を、くはしく報告しま

した。

『ウン、よくやつた。赤井君はなかく役に立ちさうな人物だ。それに、明智に深い恨を持つてゐるのが何より氣に入つたよ。』

二十面相は、名探偵を虜にした嬉しさに、何もかも上機嫌です。

そこで赤井は改めて、弟子入の嚴かな誓を立てさせられましたが、それがすむと、この浮浪人は、最前から不思議で堪らなかつたことを、早速たづねたものです。

『この家の仕掛には驚きましたぜ。これなら警察なんか怖くないはずですな。だが、どうもまだ腑に落ちねえことがある。さつき玄關へ来たばかりの時に、どうしてお頭にあつしの姿が見えたんてすい？』

『ハハハ……、それかい。それはね、ホラ、こゝを覗いて見たまへ。』

首領は天井の一個から下つてゐるストーブの煙突みたいなものを指さしました。覗いて見よといはれるものですから、赤井はそこへ行つて、煙突の下の端が鉤の手に曲つてゐる筒口へ、目を當てて見ました。

すると、これはどうでせう。その筒の中に、この家の玄關から門にかけての景色が、可愛らしく縮小されて映つてゐるではありませんか。最前の門番の男が、忠實に門の内側に立つてゐるのもハツキ

り見えます。

『潜水艦に使ふ潜望鏡と同じ仕掛なんだよ。あれよりもつと複雑に折れ曲つてゐるけれどね。』

道理で、あんなに光の強い電燈が必要だつたのです。

『だが、君が今まで見たのは、この家の機械仕掛の半分にも足りないのだよ。その中には、僕の外は誰も知らない仕掛もある。なにしろ、これが僕の本當の根城だからね。こゝの外にも、幾つかの隠家があるけれど、それらは、敵をあざむくホンの假住居に過ぎないのさ。』

すると、いつか小林少年が苦しめられた戸山ヶ原の荒屋も、その假の隠家の一軒だつたのでせうか。『いづれ君にも見せるがね、この奥に僕の美術室があるんだよ。』

二十面相は相變らず上機嫌で、喋りすぎる程喋るのです。見れば彼の安樂椅子のうしろに、大銀行の金庫のやうな、複雑な機械仕掛の大きな鐵の扉が、嚴重に閉めきつてあります。

『この奥に幾つも部屋があるんだよ。ハハハ……、驚いてゐるね。この地下室は、地面に建つてゐる家よりもすつと廣いのだ。そして、その部屋々に、僕の生涯の戦利品が、ちゃんと分類して陳列してあるつてわけだよ。そのうち見せてあげるよ。』

まだ何も陳列してない空つぽの部屋もある。そこへはね、ごく近日、どつさり國寶が入ることになつてゐるんだ。ホラ、君も新聞で讀んでゐるだらう。例の帝國博物館の澤山の寶物さ。ハハハ……』

もう明智といふ大敵を除いてしまつたのだから、それらの美術品は手に入れたも同然だとばかり、二十面相はさも心地よげに、カラ／＼と打笑ふのでした。

少年探偵團

翌朝になつても明智探偵が歸宅しないものですから、留守宅は大騒になりました。

探偵が同伴して出かけた、事件依頼者の婦人の住所が控へてありましたので、そこを調べますと、そんな婦人なんか住んでゐないことが分かりました。さては二十面相の仕業であつたかと、人々は始めてそこへ氣がついたので。

各新聞の夕刊は、『名探偵明智小五郎氏誘拐さる』といふ大見出しで、明智の寫眞を大きく入れて、この椿事をデカ／＼と書き立て、ラヂオもこれをくはしく報道しました。

『ア、頼みに思ふ我等の名探偵は賊の虜になつた。博物館が危い。』

六百萬の市民は、わがことのやうにくやしがり、そこでもこゝでも、人さへ集れば、もうこの事件の噂ばかり、全市の空が、何ともいへない陰鬱な、不安の黒雲に覆はれたやうに、感じないではゐられませんでした。

しかし、名探偵の誘拐を、世界中で一番残念に思つたのは、探偵の少年助手小林芳雄君でした。

一晩待ち明かして朝になつても、又一日空しく待つて、夜が來ても、先生はお歸りになりません。

警察では二十面相に誘拐されたのだといひますし、新聞やラヂオまでその通りに報道するのですから、先生の身の上が心配なばかりでなく、名探偵の名譽の爲に、くやし／＼と、くやし／＼と堪らな

いのです。

その上、小林君は自分の心配の外に、先生の奥さんを慰めなければなりません。さすが明智探偵の夫人ほどあつて、涙をみせるやうなことはなさいませんでした。不安に堪へぬ青ざめた顔に、わざと笑顔を作つていらつしやる様子を見ますと、お氣の毒で、じつとしてゐられないのです。

『奥さん大丈夫ですよ。先生が賊の虜になんかなるもんですか。きつと先生には僕達の知らない、何か深い計略があるのですよ。それでこんなにお歸りがおくれるんですよ。』

小林君は、そんな風にいつて、しきりと明智夫人を慰めました。しかし、別に自信があるわけではなく、喋つてゐるうちに、自分の方でも不安がこみ上げて來て、言葉も途切れがちになるのでした。

名探偵助手の小林君も、今度ばかりは、手も足も出ないのです。二十面相の隠家を知る手掛は全くありません。

一昨日は、賊の部下が紙芝居屋に化けて、様子を探りに来てゐたが、もしや今日も怪しい人物が、その邊をうろくしてゐないかしら。さうすれば賊の住家を探る手だでもあるんだがと、一縷の望に度々二階へ上つて表通を見廻しても、それらしい者の影さへさしません。賊の方では、誘拐の目的を果してしまつたのですから、もうさういふことをする必要がないのでせう。

そんな風にして、不安の第二夜も明けて、三日目の朝のことでした。

その日は丁度日曜日だつたのですが、明智夫人と小林少年が、淋しい朝食を終つたところへ、玄關へ鐵砲玉のやうに、飛び込んで來た少年がありました。

『ごめん下さい。小林君ゐますか。僕羽柴です。』

すき通つた子供の叫聲に、驚いて出てみますと、オ、そこには久し振の羽柴壯二少年が、可愛らしい顔を眞赤に上氣させて、息を切らして立つてゐました。よつほど大急ぎで走つて來たものとみえます。

讀者諸君はよもやお忘れではありません。この少年こそ、いつか自宅の庭園に良を仕掛けて、二十面相を手ひどい目に會はせた、あの大實業家羽柴壯太郎氏の息子さんです。

『オヤ、壯二君ですか。よく來ましたね。サア、お上りなさい。』

小林君は自分より二つばかり年下の壯二君を、弟かなんぞのやうに勞つて、應接室へ導きました。

『で、なんか急な用事でもあるんですか。』

たづねますと、壯二少年は、大人のやうな口調で、こんなことをいふのでした。

『明智先生大へんでしたね。まだ行方が分からないのでせう。それについてね、僕少し相談があるんです。』

あのね、いつかの事件の時から、僕、君を崇拜しちやつたんです。そしてね、僕も君のやうになりたいと思つたんです。それから、君の働きのことを學校でみんなに話したら、僕と同じ考へのもものが十人も集つちやつたんです。

それで、みんなで、少年探偵團つていふ會を作つてゐるんです。無論學校のおさらひやなんかの邪魔にならないやうにですよ。僕のお父さんも、學校さへ怠けなければ、まあいゝつて許して下さつたんです。

今日は日曜でせう。だもんだから、僕みんなを連れて、君ん家へお見舞ひに來たんです。そしてね、みんなはね、君の指圖を受けて、僕達少年探偵團の力で、明智先生の行方を探さうぢやないかつていつてるんです。』

一息にそれだけいつてしまふと、壯二君は、可愛い目で、小林少年を睨みつけるやうにして、返事を待つのでした。

『ありがたう。』

小林君はなんだか涙が出さうになるのを、やつと我慢して、ギユツと壯二君の手を握りました。

『君達のことを明智先生がお聞きになつたら、どんなにお喜びになるか知れないですよ。エ、君達の探偵團で僕をたすけて下さい。』

みんなで何か手掛を探し出し



ませう。

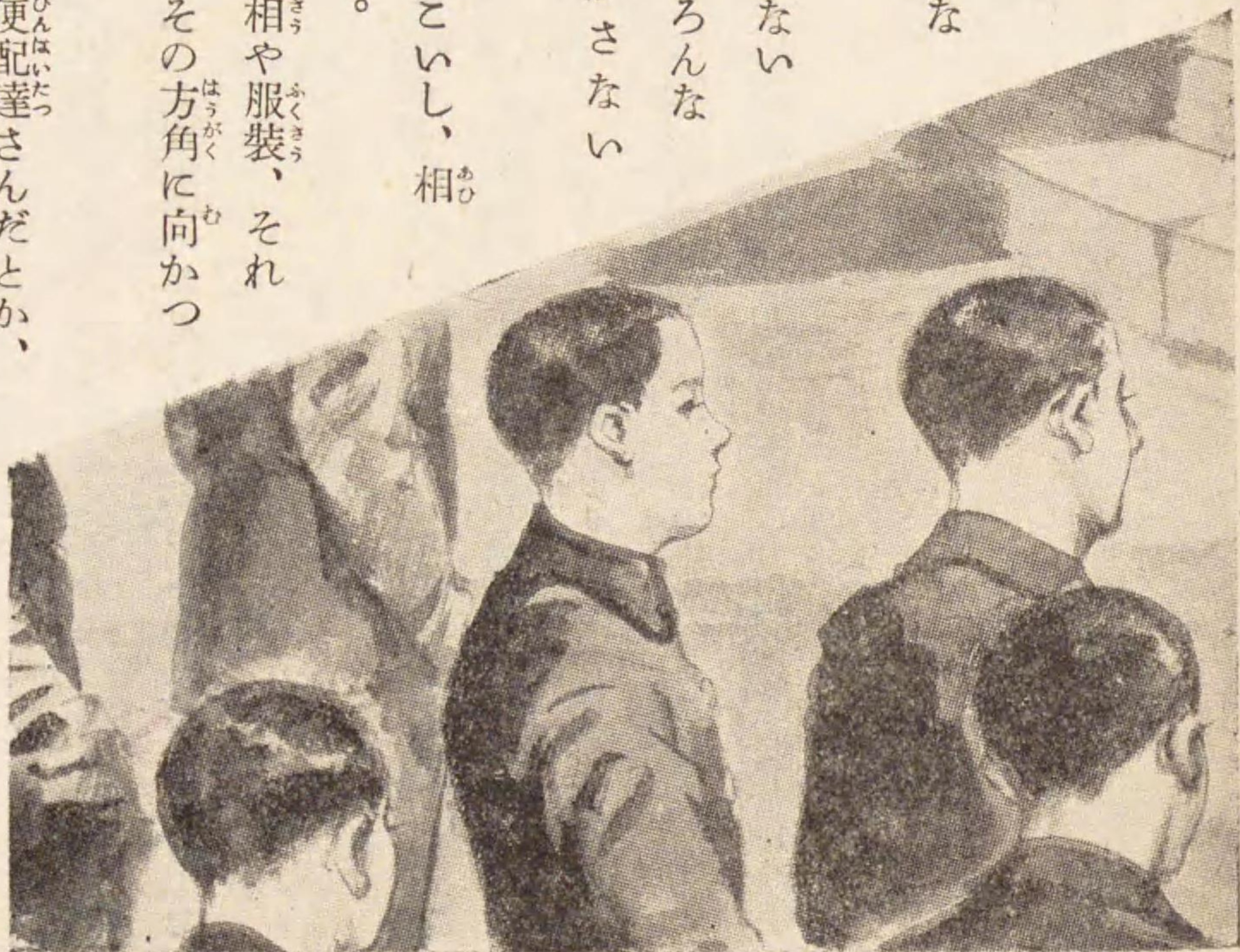
けれどね、君達は僕とは違ふんだから、危険なことはやらせませんよ。もしものことがあると、みんなのお父さんやお母さんに申譯ないですからね。

しかし、僕が今考へてゐるのは、ちつとも危険のない探偵方法です。君、「聞込」つての知つてますか。いろんな人の話を、聞いて廻つて、どんな小さなことものがさないで、うまく手掛をつかむ探偵方法なんです。

なまじつか大人なんかより、子供の方がすばしつこいし、相手が油断するから、きつとうまく行くとおもひますよ。

それにはね、一昨日の晩先生を連れ出した女の人相や服装、それから自動車の行つた方角も分かつてゐるんだから、その方角に向かつて、僕らが今の聞込をやればいゝんですよ。

店の小僧さんでもいゝし、御用聞でもいゝし、郵便配達さんだとか、その邊に遊んでゐる子供なんかつかまへて、あきずに聞いて廻るんですよ。



こゝでは方角が分かつてゐても、先になるほど道が分かれてゐて、見當をつけるのが大へんだけれど、人数が多いから、大丈夫だ。道が分かれる度に、一人づつその方へ行けばいいんです。

さうして、今日一日聞込をやれば、ひよつとしたらなにか手掛がつかめるかも知れないですよ。』
『エ、さうしませう。そんなことわけないや。ぢや、探偵團のみんなを門の中へ呼んでもいいですか。』

『エ、どうぞ、僕も一緒に外へ出ませう。』

そして、二人は明智夫人の許しを得た上、ボーチのところへ出たのですが、壯二君はいきなり門の外へ駆け出して行つたかと思ふと、間もなく、十人の探偵團員を引きつれて、門内へ引返して來ました。

見ると、みんなお揃いの制服を着た、小學校上級生の、健康で快活な少年達でした。

小林君は、壯二君の紹介で、ボーチの上から、みんなに挨拶しました。そして、明智探偵捜査の手段について、こま／＼と指圖を與へました。

無論一同大賛成です。

『小林團長バンザイ。』

もうすつかり團長に祭り上げてしまつて、嬉しさのあまり、そんなことを叫ぶ少年さへありました。

『ぢや、これから出發しませう。』
そして、一同は少年團のやうに、足なみ揃へて、明智邸の門外へ消えて行くのでした。

午後四時

少年探偵團のけなげな捜索は、日曜、月曜、火曜、水曜と、學校の餘暇を利用して、忍耐強くつゞけられました。が、いつまでたつても、これといふ手掛はつかめませんでした。

しかし、東京中の何千人といふ大人のお巡さん達にさへ、どうすることも出来ない程の難事件です。手掛が得られなかつたといつて、決して少年捜索隊の無能のせむではありません。それに、これらの勇ましい少年達は、後日又どのやうな手柄を立てないものでもないのです。

明智探偵行方不明のまゝ、恐しい十二月十日は、一日々々と迫つて來ました。警視廳の人達はもうあてもたつてもゐられない氣持です。なにしろ盜難を豫告された品物が、國家の寶物といふのですから、捜査課長や、直接二十面相の事件に關係してゐる中村係長などは、心配の爲に瘦せ細る思ひました。

ところが、問題の日の三日前、十二月八日には、又々世間の騒を大きくするやうな出來事が起つた

のです。といふのは、その日の東京毎日新聞の社會面に、二十面相からの投書が麗々しく掲載されたことでした。

東京毎日新聞は別に賊の機關新聞といふわけではありませんが、この騒ぎの中心になつてゐる二十面相その人からの投書とあつては、問題にしないわけには行きません。直ちに編輯會議まで開いて、結局その全文をのせることにしたのでした。

それは長い文章でしたが、意味をかいつまんで記しますと、

『私は兼ねて博物館襲撃の日を十二月十日と豫告しておいたが、もつと正確に約束する方が、一層男らしいと感じたので、こゝに東京市民諸君の前に、その時間を通告する。』

それは「十二月十日午後四時」である。博物館長も警視總監も、出来る限りの警戒をして頂きたい。警戒が嚴重であればあるほど、私の冒険はその輝きを増すであらう』

ア、、なんたることでせう。日附を豫告するだけでも、驚くべき大膽さですのに、その上時間までハッキリと公表してしまつたのです。そして、博物館長や警視總監に失禮千萬な注意まで與へてゐるので。

これを讀んだ市民の驚きは申すまでもありません。今までは、そんな馬鹿々々しいことがと、あざ

笑つてゐた人々も、もう笑へなくなりました。

當時の博物館長は、史學界の大先輩、北小路文學博士でしたが、その偉い老學者さへも、賊の豫告を本氣にしないではゐられなくなつて、わざわざ警視廳に出向き、警戒方法について、警視總監と色々打合せをしました。

いや、そればかりではありません。二十面相のことは、國務大臣方の閣議の話題にさへ上りました。中にも内務大臣や司法大臣などは、心配のあまり、警視總監を別室に招いて、激勵の言葉を與へたほどです。

そして、全市民の不安のうちに、空しく日がたつて、とう／＼十二月十日となりました。帝國博物館では、その日は早朝から、館長の北小路老博士を始めとして、三人の係長、十人の書記、十五人の守衛や小使が、一人残らず出勤して、それ／＼警戒の部署につきました。

無論當日は表門を閉ちて、觀覽禁止です。警視廳からは、中村捜査係長の率ゐる選りすぐつた警官隊五十名が出張して、博物館の表門、裏門、塀のまはり、館内の要所々々にかんばつて、蟻の這ひ入る隙もない、大警戒陣です。

午後三時半、あますところ僅かに三十分、警戒陣は物々しく殺氣立つて來ました。そこへ、警視廳の大型自動車到着して、警視總監が刑事部長を從へて現れました。總監は心配のあまり、もうじつ

としてゐられなくなつたのです。總監自身の目で、博物館を見守つてゐなければ、我慢が出来なくなつたのです。

總監たちは一同の警戒ぶりを視察した上、館長室に通つて、北小路博士に面會しました。

『わざ／＼あなたがお出掛け下さるとは思ひませんでした。恐縮です。』

老博士が挨拶しますと、總監は少しきまり悪さうに笑つて見せました。

『イヤ、お恥づかしいことですが、じつとしてゐられませんでね。たかが一盗賊の爲に、これほどの騒をしなければならんとは、實に恥辱です。わしは警視廳に入つて以來、こんなひどい恥辱を受けたことは始めてです。』

『アハハ……』老博士は力なく笑つて、『わたしも御同様です。あの青二才の盜賊の爲に、一週間といふもの、不眠症に罹つてをるのですからな。』

『しかし、もうあますところ二十分ほどですよ。エ、北小路さん、まさか二十分間に、この嚴重な警戒を破つて、澤山の美術品を盗み出すなんて、いくら魔法使でも、少しむづかしい藝當ぢやありませんまいか。』

『分かりません。わしには魔法使のことは分かりません。たゞ一刻も早く四時が過ぎ去つてくれればよいと思ふばかりです。』

老博士は怒つたやうな口調でいひました。あまりのことに、二十面相の話をするのも腹立たしいのでせう。

室内の三人は、それきり黙り込んで、たゞ壁の時計と睨めつこをするばかりでした。

金モールいかめしい制服に包まれた、角力とりのやうに立派な體格の警視總監、中肉中背で、八字髭の美しい刑事部長、背廣姿で、鶴のやうに痩せた白髪白髭の北小路博士、その三人が、それ／＼安樂椅子に腰かけて、チラ／＼と時計の針を眺めてゐる様子は、物々しいといふよりは、何かしら奇妙な、場所にそぐはぬ光景でした。

さうして十數分が経過した時、沈黙に堪へかねた刑事部長が、突然口を切りました。

『ア、明智君は一體どうしてゐるんでせうね。私はあの男とは懇意にしてゐたんですが、どうも不思議ですよ。今までの経験から考へても、こんな失策をやる男ではないのですがね。』

その言葉に、總監は太つた身體を捻ぢ曲げるやうにして、部下の顔を見ました。

『君達は、明智々々と、まるであの男を崇拜でもしてゐるやうなことをいふが、僕は不賛成だね。いくら偉いといつても、たかが一民間探偵ぢやないか。どれほどのことが出来るものか。一人の力で二十面相を捉へてみせるなどといつてゐたさうだが、廣言が過ぎるよ。今度の失敗はあの男にはよい藥ぢやらう。』

『ですが、明智君のこれまでの功績を考へますと、一概にさうもいひきれないのです。今も外で中村君と話したことです。こんな際、あの男がゐてくれたらと思ひますよ。』

刑事部長の言葉が終るか終らぬ時でした。館長室のドアが静かに開かれて、一人の人物が現れました。

『明智はこゝにをります。』

その人物が、ニコ／＼笑ひながら、よく通る聲でいつたのです。

『オ、明智君！』

刑事部長が椅子から飛び上つて叫びました。

それは、恰好のよい黒の背廣をピツタリと身につけ、頭の毛をモジャ／＼にした、いつに變らぬ明智小五郎その人でした。



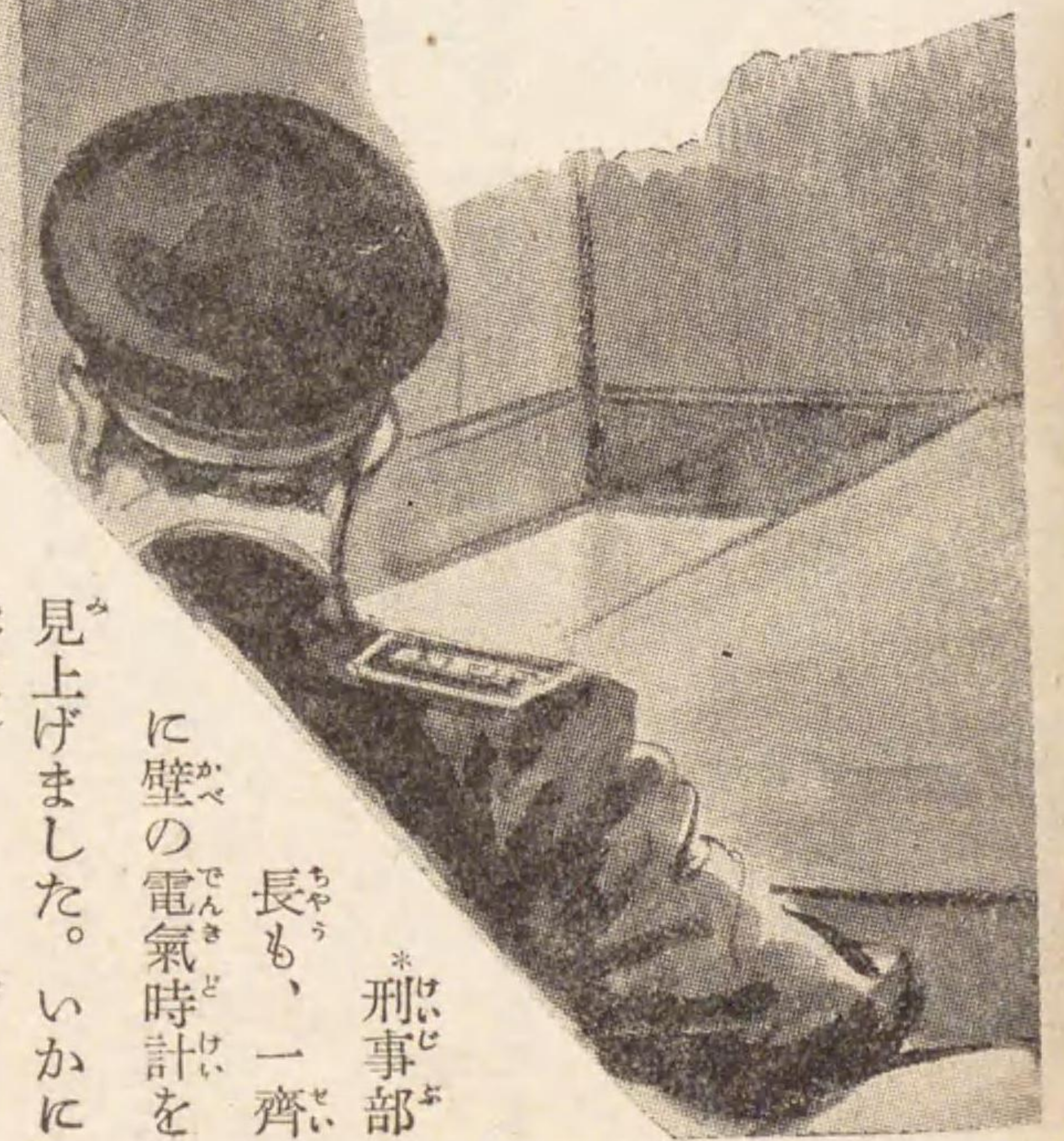
『明智君、君はどうして……』

『それはあとでお話しします。今はもつと大切なことがあるのです。』

『無論、美術品の盗難は防がなくてはならんが……』

『イヤ、それはもうおそいのです。ごらんなきい。約束の時間は過ぎました。』

明智の言葉に、館長も、總監も、*



も、長針はもう十二時のところをすぎてゐるのです。

『オヤ／＼、すると二十面相は、嘘をついたわけかな。館内には別に異状もないやうだが……』

『ア、さうです。約束の四時は過ぎたのです。あいつ、やつ

ばり手出しが出来なかつたのです。』

刑事部長が凱歌を上げるやうに叫びました。

『イヤ、賊は約束を守りました。この博物館はもう空っぽも同様です。』

明智が重々しい口調でいひました。

名探偵の狼藉

『エ、エ、君は何をいつてゐるんだ。何も盗まれてなんかのやしないぢやないか。僕はつい今しがた、この目で陳列室をすつと見廻つて来たばかりなんだぜ。それに、博物館のまはりには、五十人の警官が配置してあるんだ。僕のところの巡査達は盲人ぢやないんだからね。』

警視總監は明智を睨みつけて、腹立たしげに呶鳴りました。

『ところが、すつかり盗み出されてゐるのです。二十面相は例によつて魔法を使ひました。なんでしたら御一緒に調べてみようではありませんか。』

明智は静かに答へました。

『フーン、君は確かに盗まれたといふんだね。よし、それぢやみんな調べてみよう。館長、この

男のいふのが本當かどうか、とも角陳列室へ行つてみようぢやありませんか。』

まさか明智が嘘をいつてゐると思へませんので、總監も一度調べて見る氣になつたのです。

『それがいゝでせう。サア、北小路先生、御一緒に参りませう。』

明智は白髪白髯の老館長にニツコリほゝゑみかけながら、促しました。

そこで、四人は連立つて館長室を出ると、廊下づたひに本館の陳列場の方へ入つて行きました。が、明智は北小路館長の老體をいたはるやうにその手を取つて、先頭に立つのでした。

『明智君、君は夢でも見たんぢやないか。どこにも異状はないぢやないか。』

陳列場に入るや否や、刑事部長が叫びました。

いかにも部長のいふ通り、ガラス張の陳列棚の中には、國寶の佛像がズラツと並んでゐて、別に無くなつた品もない様子です。

『これですか。』

明智はその佛像の陳列棚を指さして、意味ありげに課長の顔を見返しながら、そこに立つてゐた守衛に聲をかけました。

『このガラス戸を開いてくれ給へ。』

守衛は明智小五郎を見知りませんでしたけれど、館長や警視總監と一緒に居ますから、命令に



あるものは腕を折られ、あるものは首をもぎ取られ、あるものは指を引きちぎられて、見るも無残な有様です。

『明智君、なにをする。オイ、いけない。よさんか。』



應じて、すぐさま持つてゐた鍵で、大きなガラス戸を、ガラ／＼と開きました。

すると、その次の瞬間、實に異様なことが起つたのです。

ア、明智探偵は氣でも違つたのでせうか。彼は廣い陳列棚の中へ入つて行つたかと思ふ

と、中でも一番大きい、木彫の古代佛像に近づき、いきなりその恰好のよい腕を、ホ

キンと折つてしまつたではありませんか。

しかもその素早いこと。三人の人達が、あつけにとられ、とめるのも忘れて、

目をみはつてゐる間に、同じ陳列棚の、どれもこれも國寶ばかりの五つの佛

像を、次から次へと、忽ちの内に、片つぱしから取返しのかね傷物にし

てしまひました。

總監と刑事部長とが、聲を揃へて嗷鳴りつけるのを聞流して、明智はサツと陳列棚を飛出すと、又最前のやうに老館長の側へより、その手を握つて、ニコくと笑つてゐるのです。

『オイ、明智君、一體どうしたといふんだ。亂暴にも程があるぢやないか。これは博物館の中でも一番貴重な國寶ばかりなんだぞ。』

眞赤になつておこつた刑事部長は、兩手をふり上げて、今にも明智に掴みかゝらんばかりの有様です。

『ハハハ……、これが國寶だつて？ あなたの目はどこについてゐるんです。よく見て下さい。今僕が折り取つた佛像の傷口を、よく調べて下さい。』

明智の確信に満ちた口調に、刑事部長は、ハツとしたやうに、佛像に近づいて、その傷口を眺めました。

すると、どうでせう。首もがれ、手を折られたあとの傷口からは、外見の黒ずんだ古めかしい色合とは似てもつかない、まだ生々しい白い木口が覗いてゐたではありませんか。奈良時代の彫刻に、こんな新しい材料が使はれてゐる筈はありません。

『すると、君は、この佛像が贋物だといふのか。』

『さうですとも、あなた方にもう少し美術眼がありさへすれば、こんな傷を拵へて見るまでもなく、

一目で贋物と分かつた筈です。新しい木で模造品を作つて、外から塗料を塗つて古い佛像のやうに見せかけたのですよ。模造品専門の職人の手にかけてさへすれば、譯なく出来るのです。』

明智はこともなげに説明しました。

『北小路さん、これは一體どうしたことせう。帝國博物館の陳列品が、眞赤な偽物だなんて……』
警視總監が老館長を語るやうにいひました。

『あきれました。あきれたことです。』

明智に手を取られて、茫然と佇んでゐた老博士が、狼狽しながら、てれ隠しのやうに答へました。そこへ、騒を聞きつけて、三人の館員があわただしく入つて來ました。その中の一人は、古代美術鑑定で、その方面の係長を勤めてゐる人でしたが、毀れた佛像を一目見ると、さすがに忽ち氣づいて叫びました。

『アツ、これはみんな模造品だ。しかし、變ですな。昨日までは確かに本物がここに置いてあつたのですよ。私は昨日の午後、この陳列棚の中へ入つたのですから、間違ひありません。』

『すると、昨日まで本物だつたのが、今日突然贋物に變つたといふのだね。變だな。一體これはどうしたといふのだ。』

總監が狐につまゝれたやうな表情で、一同を見廻しました。

『まだお分かりになりませんか。つまり、この博物館の中は、すっかり空っぽになつてしまつたといふことですよ。』

明智はかういひながら、向側の別の陳列棚を指さしました。

『な、なんだつて？　すると、君は……』

刑事部長が思はず頓狂な聲を立てました。

最前の館員は、明智の言葉の意味を悟つたのか、ツカ／＼とその棚の前に近づいて、ガラスに顔をくつつけるやうにして、中に掛け並べた黒ずんだ佛畫を凝視しました。そして、忽ち叫び出すのでした。

『アツ、これも、これも、あれも、館長、館長、この中の繪は、みんな贋物です。一つ残らず贋物です。』

『外の棚を調べてくれ給へ。早く、早く。』

刑事部長の言葉を待つまでもなく、三人の館員は、口々に何かわめきながら、氣違のやうに陳列棚から陳列棚へと、覗き廻りました。

『贋物です。目ぼしい美術品は、どれもこれも、すっかり模造品です。』

それから、彼等は轉がるやうに、階下の陳列場へ降りて行きましたが、暫くして、元の二階へ戻つ

て来た時には、館員の人数は、十人以上に増えてゐました。そして、誰も彼も、もう眞赤になつて憤慨してゐるのです。

『下も同じことです。残つてゐるのはつまらないものばかりです。貴重品といふ貴重品は、すっかり贋物です。……しかし、館長、今もみんなと話したのですが、實に不思議といふ外はありません。』

昨日までは確かに、模造品なんて一つもなかつたのです。それ／＼受持のものが、その點は自信を以て斷言してゐます。それが、たつた一日の内に、大小百何點といふ美術品が、まるで魔法のやうに、贋物に變つてしまつたのです。』

館員は口惜しさに地だんだを踏むやうにして叫びました。

『明智君、我々は又しても奴の爲に、まんまとやられたらしいね。』

總監が沈痛な面持で名探偵を顧みました。

『さうです。博物館は二十面相の爲に盗奪されたのです。それは、最初に申し上げた通りです。』

大勢の中で、明智だけは、少しも取亂したところもなく、口許に微笑さへ浮かべてゐるのでした。そして、あまりの打撃に、立つてゐる力もないかと思える老館長を、勵ますやうに、しつかりその手を握つてゐました。

種明し

『ですが、私共には、どうも譯が分からないのです。あれだけの美術品を、たつた一日の間に、贋物とすり替へるなんて、人間業に出来ることではありません。マア贋物の方は、前々から、美術學生がなんかに化けて觀覽に来て、繪圖を書いて行けば、模造出来ないことはありませんけれど、それをどうして入れ替へたかが問題です。全く譯が分かりません。』

館員はまるでむづかしい數學の問題にでも、ぶつかつたやうにしきりに小首を傾けてゐます。

『昨日の夕方までは、確かにみんな本物だつたのだね。』

總監がたづねますと、館員達は確信に満ちた様子で、

『それはもう、決して間違ひございません。』

と口を揃へて答へるのです。

『すると、恐らく昨夜の夜中あたりに、どうかして二十面相一味のものが、こゝへ忍び込んだのかも知れんね。』

『イヤ、そんなことは出来る筈がございません。表門も裏門も塀のまはりも、大勢のお巡さんが、徹

夜で見張つてゐて下すつたのです。館内にも、昨夜は館長さんと三人の宿直員が、ずつと詰めてゐたのです。その嚴重な見張の中をくゞつて、あの夥しい美術品を、どうして持ち込んだり、運び出したり出来るものですか。全く人間業では出来ないことです。』

館員はあくまでいひ張りしました。

『分らん。實に不思議だ。……しかし、二十面相の奴、廣言した程男らしくもなかつたですね。』

豫め贋物と置き替へて置いて、サアこの通り盗みましたといふのぢや、十日の午後四時なんて豫告は、全く無意味ですからね。』

刑事部長は口惜しまぎれに、そんなことでもいつてみないではゐられませんでした。

『ところが、決して無意味ではなかつたのです。』

明智小五郎が、まるで二十面相を辯護でもするやうにいひました。彼は老館長北小路博士と、さも仲よしのやうに、ずつと最前から手を握り合つたまゝなのです。

『ホウ、無意味でなかつたつて？ それは一體どういふことなんだね。』

警視總監が、不思議さうに名探偵の顔を見て、たづねました。

『あれをごらん下さい。』

すると明智は窓に近づいて、博物館の裏手の空地を指さしました。

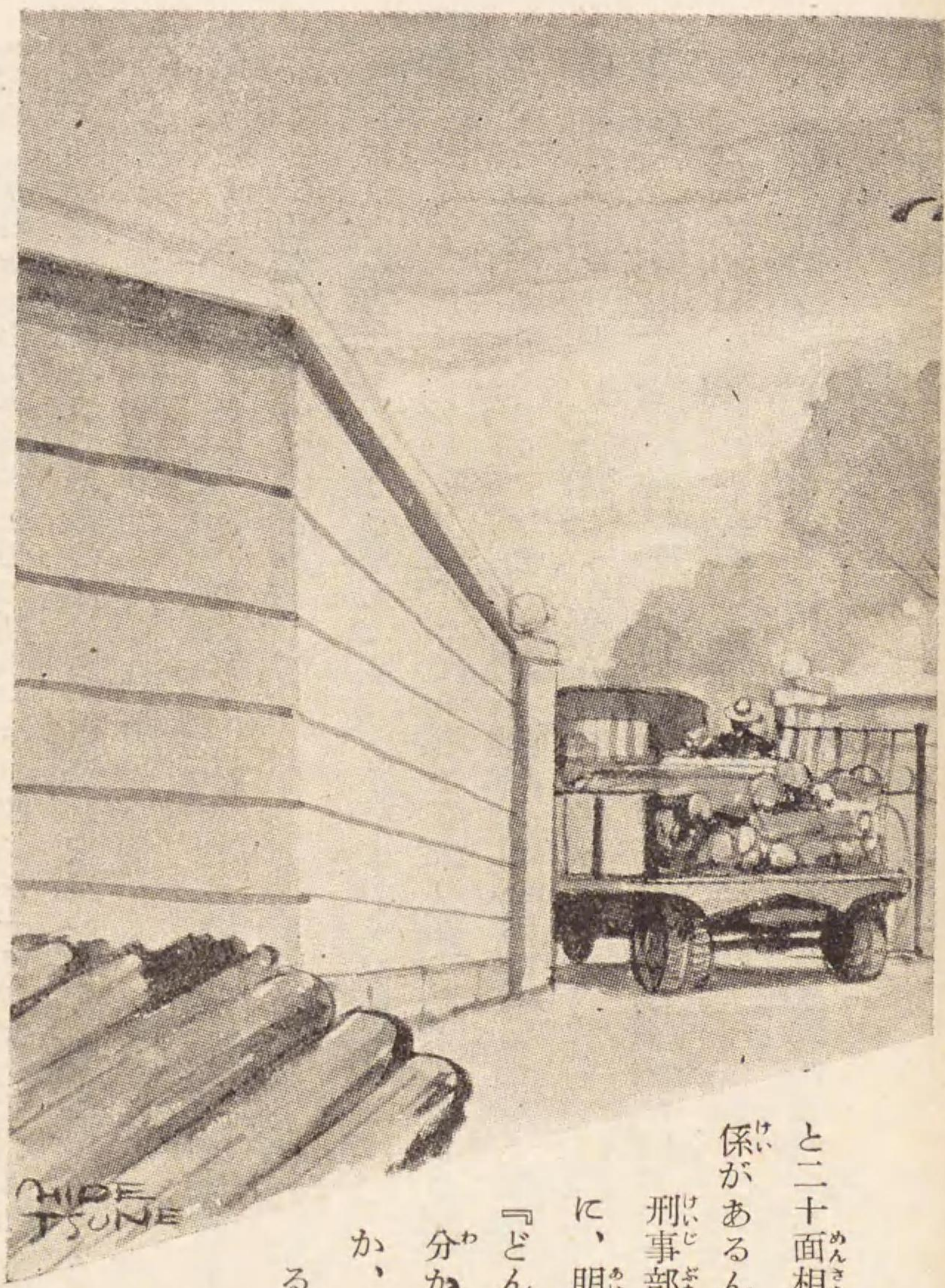


『賊が十二月』

十日頃まで、待たなければならなかつた秘密といふのは、あれなのです。』

その空地には、博物館創立當時からの、古い日本建の館員宿直室が建つてゐたのです。それが不用になつて、数日前から、家の取毀しを始め、もう殆ど取毀しも終つて、古材木や、屋根瓦などがあつちこつちに積み上げてあるのです。

『古家を取毀したんだね。しかし、あれ』



と二十面相の事件と、一體何の關係があるんです。』

刑事部長はビックリしたやうに、明智を見ました。

『どんな關係があるか、おき分かれますよ。……どなたか、お手数ですが、下にゐる中村警部に、今日晝頃裏門の番をしてゐた警官をつれて、いそいでこゝへ来てくれるやうに、お傳へ下さい』

ませんか。』

明智の指圖に、館員の一人が、何か譯が分からぬながら、大急ぎで階下へ降りて行きましたが、間もなく中村捜査係長と一人の警官を伴つて歸つて來ました。

「君が、晝頃裏門のところにもた方ですか。」

明智が早速たづねますと、警官は總監の前だものですから、ひどく改つて、直立不動の姿勢で、さうですと答へました。

「では、今日正午から一時頃までの間に、トラックが一臺、裏門を出て行くのを見たでせう。」

「ハア、おたづねになつてゐるのは、あの取毀し家屋の古材木を積んだトラックのことではありませんか。」

「さうです。」

「それならば確かに通りました。」

警官は、あの古材木がどうしたんですといはぬばかりの顔附です。

「皆さんお分かりになりましたか。これが賊の魔法の種です。うはべは古材木ばかりのやうに見えてゐて、その實、あのトラックには、盜難の美術品が全部積込んであつたのですよ。」

明智は一同を見廻して、驚くべき種明しをしました。

「すると、取毀しの人夫の中に賊の手下が混つてゐたといふのですか。」

中村係長は目をパチ／＼させて聞返しました。

「さうです。混つてゐたのではなくて、人夫の全部が賊の部下だつたかも知れません。二十面相は早

くから萬端の準備をととのへて、この絶好の機會を待つてゐたのです。家屋の取毀しは確か十二月五日から始つたのでしたね。その着手期日は三月も四月も前から、關係者には分かつてゐた筈です。さうすれば、十日頃は丁度古材木運び出しの日に當るぢやありませんか。豫告の十二月十日といふ日附は、かういふところから割出されたのです。又午後四時といふのは、本物の美術品がちゃんと賊の巢窟に運ばれてしまつて、もう贓物がわかつて差支へないといふ時間を意味したのです。」

ア、何といふ用意周到な計畫だつたでせう。二十面相の魔術には、いつの時も、一般の人の思ひも及ばない仕掛が、ちゃんと用意してあるんです。

「しかし明智君、たとへそんな方法で運び出すことは出来たとしても、まだ賊がどうして陳列室へ入つたか、いつの間に本物と贓物と置き替へたかといふ謎は、解けませんね。」

刑事部長が明智の言葉を信じ兼ねるやうにいふのです。

「置き替へは昨日の夜更に行はれました。」

明智は何もかも知り抜いてゐるやうな口調で語りつゞけます。

「賊の部下が化けた人夫達は、毎日こゝへ仕事に来る時に、贓物の美術品を少しづつ運び入れました。繪は細く巻いて、佛像は分解して手、足、首、胴と別々に蒲包にして、大工道具と一緒に持込めば、疑はれる氣遣ありません。皆盗み出されることばかり警戒してゐるのですから、持込むものに

注意なんかしませんからね。そして、贋造品は全部、古材木の山に蔽ひ隠されて、昨夜の夜更を待つてゐたのです。』

『だが、それを誰が陳列室へ置き替へたのです。人夫達は皆夕方歸つてしまふぢやありませんか。たとへその内の何人かが、コツソリ構内に残つてゐたとしても、どうして陳列室へ入ることが出来ます。夜はすつかり出入口が閉ざされてしまふのです。館内には館長さんや三人の宿直員が、一睡もしないで見張つてゐました。その人達に知れぬやうに、あのたくさんの品物を置き替へるなんて、全く不可能ぢやありませんか。』

館員の一人が實にもつともな質問をしました。

『それには又、實に大膽不敵な手段が用意してあつたのです。昨夜の三人の宿直員といふのは、今朝それ／＼自宅へ歸つたのでせう。一つその三人の自宅へ電話をかけて、主人が歸つたかどうか確かめてみて下さい。』

明智が又しても妙なことをいひ出しました。三人の宿直員は誰も電話を持つてゐませんでした。それ／＼附近の商家に呼出し電話が通じますので、館員の一人が早速電話をかけてみますと、三人が三人とも、昨夜以來まだ自宅へ歸つてゐないことが分かりました。宿直員達の家庭では、こんな事件の際ですから今日も留め置かれてゐるのだらうと安心してゐたといふのです。

『三人が博物館を出てからもう八九時間もたつのに、揃ひも揃つてまだ歸宅してゐないといふのは、少しをかしいぢやありませんか。昨夜徹夜をした疲れた身體で、まさか遊び廻つてゐる譯ではありません。なぜ三人が歸らなかつたのか、この意味がお分かりですか。』

明智は又一同の顔をグルツと見廻しておいて、言葉をつゞけました。

『外でもありません。三人は二十面相一味の爲に誘拐されたからです。』

『エ、誘拐された？ それはいつの事です。』

館員が叫びました。

『昨日の夕方、三人がそれ／＼夜勤をつとめる爲に、自宅を出たところをです。』

『エ、エ、昨日の夕方ですつて？ ぢや昨夜こゝにゐた三人は……』

『二十面相の部下でした。本當の宿直員は賊の巢窟へ押しこめておいて、その代りに賊の部下が博物館の宿直を勤めたのです。なんて譯のない話でせう。賊が見張番を勤めたんですから、贋物の美術品の置替へなんて、實に造作もないことだつたのです。皆さん、これが二十面相のやり口ですよ。人間業では出来さうもないことを、ちよつとした頭の働きで易々とやつてのけるのです。』

明智探偵は、二十面相の頭のよさを褒め上げるやうにいつて、すつと手をつないでゐた館長北小路老博士の手首を痛いほど、ギユツと握りしめました。

『ウーン、あれが賊の手下だったのか。迂濶ぢやつた。わしが迂濶ぢやつた。』
老博士は白髯を震はせて、さも口惜しさうにうめきました。兩眼が吊り上つて、顔が眞青になつて、見るも恐ろしい憤怒の形相です。

しかし、老博士は三人の賢者をどうして看破ることが出来なかつたのでせう。二十面相なら知らぬこと、手下の三人が、館長にも分からない程上手に變装してゐたなんて、考へられないことです。北小路博士ともあらう人が、そんなに易々とだまされるなんて、少しをかしくはないでせうか。

怪盜捕縛

『だが、明智君。』

警視總監は、説明が終るのを待ちかまへてゐたやうに、明智探偵に訊ねました。

『君はまるで、君自身が二十面相でもあるやうに、美術品盜奪の順序を詳しく説明されたが、それはみんな君の想像なのかね。それとも、何か確かな根據でもあるのかね。』

『勿論、想像ではありません。僕はこの耳で、二十面相の部下から、一切の秘密を聞き知つたのです。今聞いて來たばかりなのです。』

『エ、エ、なんだつて？ 君は二十面相の部下に會つたのか。一體どこで？ どうして？』

流石の警視總監も、この不意打ちには、度膽を抜かれてしまひました。

『二十面相の隠家で會ひました。總監閣下、あなたは僕が二十面相の爲に誘拐されたことを御存じでせう。僕の家庭でも世間でもさう考へ、新聞もさう書いてをりました。しかし、あれは實を申しますと、僕の計略に過ぎなかつたのです。僕は誘拐なんかされませんでした。かへつて賊の味方になつて、ある人物の誘拐を手傳つてやつたほどです。』

昨年のことですが、僕はある日一人の不思議な弟子入志願者の訪問を受けました。僕はその男を見て、非常に驚きました。目の前に大きな鏡が立つたのではないかと怪しんだほどです。なぜと申しますと、その弟子入志願者は、背恰好から、顔附から、頭の毛の縮れ方まで、この僕と寸分違はないくらゐよく似てゐたからです。つまり、その男は僕の影武者として、何かの場合の僕の替玉として、雇つてほしいといふのです。

僕は誰にも知らせず、その男を雇ひ入れて、ある所へ住まはせて置きましたが、それが今度役に立つたのです。

僕はその日外出して、その男の隠家へ行き、すつかり服装を取替へて、僕になりすましたその男を、先に僕の事務所へ歸らせ、暫くしてから、僕自身は浮浪人赤井寅三といふものに化けて、明智事務所

を訪ね、ポーチのところへ、自分の替玉とちよつと格闘をして見せたのです。

賊の部下がその様子を見て、すつかり僕を信用しました。そして、それ程明智に恨があるなら、二十面相の部下になれと勧めてくれたのです。さういふわけで、僕は僕の替玉を誘拐するお手傳をした上、とうとう賊の巢窟に入ることが出来ました。

しかし、二十面相の奴はなかく油断がなくて、仲間入をしたその日から、僕を家の中の仕事ばかりに使ひ、一步も外へ出してくれませんでした。無論、博物館の美術品を盗み出す手段など、僕には少しも打開けてくれなかつたのです。

そして、とうとう今日になつてしまいました。僕はある決心をして、午後になるのを待構へてゐました。すると、午後二時頃、賊の隠家の地下室の入口が開いて、人夫の服装をした澤山の部下のものが、手にく貴重なる美術品を抱へて、ドカ／＼と降りて来ました。無論博物館の盗難品です。

僕は地下室に留守番をしてゐる間に、酒肴の用意をして置きました。そして歸つて来た部下と、僕と一緒に残つてゐた部下と、全部のものに祝盃を勧めました。そこで部下達は、大事業の成功した嬉しさに、夢中になつて酒盛を始めたのですが、やがて、三十分程もしますと、一人倒れ、二人倒れ、遂には残らず、氣を失つて倒れてしまひました。

なぜかとおつしやるのですか。分かつてゐるではありませんか。僕は賊の薬品室から麻醉劑を取

して、豫めその酒の中へ混ぜて置いたのです。

それから、僕は一人そこを抜け出して、附近の警察署へ駆けつけ、事情を話して、二十面相の部下の逮捕と、地下室に隠してある全部の盗難品の保管をお願いしました。

お喜び下さい。盗難品は完全に取戻すことが出来ました。帝國博物館の美術品も、あの氣の毒な日下部老人の美術城の寶物も、その外、二十面相が今までに盗み溜めたすべての品物は、すつかり元の所有者の手に歸ります。

明智の長い説明を、人々は酔つたやうに聞き惚れてゐました。ア、名探偵はその名にそむきませんでした。彼は人々の前に廣言した通り、たつた一人の力で、賊の巢窟をつきとめ、すべての盗難品を取返し、數多の悪人を捉へたのです。

『明智君、よくやつた。よくやつた。わしはこれまで、少し君を見誤つてゐたやうだ。わしから厚くお禮を申します。』

警視總監はいきなり名探偵の傍へ寄つて、その左手を握りました。

なぜ左手を握つたのでせう。それは明智の右手が塞がつてゐたからです。その右手は、いまだに、老博物館長の手と、しつかり握り合はされてゐたからです。妙ですね。明智はどうしてそんなに、老博士の手ばかり握つてゐるのでせう。

『で、二十面相の奴も、その麻酔薬を飲んだのかね。君は最前から、部下のことばかりいつて、一度も二十面相の名を出さなかつたが、まさか首領を取逃がしたのではあるまいね。』

中村捜査係長が、ふとそれに氣づいて、心配らしくたづねました。

『イヤ、二十面相は地下室へは歸つて來なかつたよ。しかし、僕はあいつもちやんと捉へてゐる。』

明智はニコ／＼と、例の人を引きつける笑顔で答へました。

『どこにゐるんだ。一體どこで捉へたんだ。』

中村警部が性急にたづねました。外の人達も、總監を始め、じつと名探偵の顔を見つめて、返事を

待ち構へてゐます。

『こゝで捕へたのさ。』

明智は落ちつき拂つて答へました。

『こゝで？ ちやあ、今はどこにゐるんだ。』

『こゝにゐるよ。』

ア、明智は何をいほうとしてゐるのでせう。

『僕は二十面相のことをいつてゐるんだぜ。』

警部がげげん顔で聞返しました。

『僕も二十面相のことをいつてゐるのさ。』

明智が鸚鵡返しに答へました。

『謎みたくないひ方はよし給へ。こゝには我々が知つてゐる人ばかりぢやないか。それとも君は、こ

の部屋の中に、二十面相が隠れてゐるとでもいふのかね。』

『マア、さうだよ。一つその證據をお目かけようか。……どなたか、度々御面倒ですが、下の應接

間に四人のお客様が待たせてあるんですが、その人達をこゝへ呼んで下さいませんか。』

明智は又々意外なことをいひ出すのです。

館員の一人が急いで下へ降りて行きました。そして、待つ程もなく、階段に大勢の足音がして、四

人のお客様といふ人々が、一同の前に立現れました。

それを見ますと、一座の人達は、あまりの驚きに、『アッ。』と叫聲を立てないではゐられませんで

した。

まづ四人の先頭に立つ白髪白髯の老紳士をごらん下さい。それはまぎれもない北小路文學博士だつ

たではありませんか。

つゞく三人は、いづれも博物館員で、昨夜宿直を勤め、今朝から行方不明になつてゐた人々です。

『この方々は、僕が二十面相の隠家から救ひ出して來たのですよ。』

明智が説明しました。

しかし、これはマアどうしたといふのでせう。博物館長の北小路博士が二人になつたではありませんか。一人は今階下から上つて来た北小路博士、もう一人は最前からズツと明智に手を取られてゐた北小路博士。

服装から顔形まで寸分違はない、二人の老博士が、顔と顔を見合はせて、睨み合ひました。

『皆さん、二十面相がどんなに變装の名人かといふことが、お分かりになりましたか。』

明智探偵は叫ぶや否や、今まで親切らしく握つてゐた老人の手を、いきなりうしろに捻上げて、床の上に組伏せたかと思ふと、白髪の鬘と、白いつけ髭とを、なんなくむしり取つてしまひました。その下から現れたのは、黒々とした髪の毛と、若々しい滑らかな顔でした。いふまでもなく、これこそ正真正銘の二十面相その人でありました。

『ハハハ……、二十面相君、ご苦勞さまだつたねえ。最前から君は随分苦しかつただらう。目の前で君の秘密が見る／＼曝露して行くのを、じつと我慢して、何食はぬ顔で聽いてゐなければならなかつたのだからね。逃げようにも、この大勢の前では逃出すわけにもゆかない。イヤ、それよりも、僕の手が、手錠の代りに、君の手首を握りつゞけてゐたんだからね。手首が痺れやしなかつたかい。マア勘辨し給へ、僕は少し君をいぢめ過ぎたかも知れないね。』

明智は、無言のまゝうなだれてゐる二十面相を、さも憐むやうに見下しながら、皮肉な慰めの言葉をかけました。

それにしても、館長に化けた二十面相は、なぜもつと早く逃げ出さなかつたのでせう。昨夜の内に目的は果してしまつたのですから、三人の替玉の館員と一緒に、サツサと引上げてしまへば、こんな恥づかしい目に會はなくてもすんだのでせうに。

しかし、讀者諸君、そこが二十面相なのです。逃げ出しもしないで、圖々しく居残つてゐたところが、如何にも二十面相らしいやり口なのです。彼は警察の人達が贗物の美術品にビツクリするところが見物したかつたのです。

若し明智が現れるやうなことが起らなかつたら、館長自身が丁度午後四時に盜難に氣づいた風を装つて、みんなをアツといはせる目論見だつたに違ひありません。如何にも二十面相らしい冒険ではありませんか。でも、その冒険が過ぎて、遂にとり返しのつかない失策を演じてしまつたのです。

さて明智探偵は、キツと警視總監の方に向き直つて、『閣下、では怪盜二十面相をお引渡しいたします。』
と、しかつめらしくいつて、一禮しました。

一同あまりに意外な場面に、たゞもうあつけに取られて、名探偵のすばらしい手柄を褒めたゝへる

ことも忘れて、身動もせず立ちすくんでゐましたが、やがて、ハツと氣を取直した中村捜査係長は、ツカ／＼と二十面相の側へ進みより、用意の捕縄を取出したかともみますと、見事な手際で、たちまち賊を後手に縛めてしまひました。

『明智君、有難う。君のお陰で、僕は恨み重なる二十面相に、今度こそ本當に繩をかけることが出来た。こんな嬉しいことはないよ。』

中村警部の目には、感謝の涙が光つてゐました。

『それでは、僕はこいつを連れて行つて、表にゐる警官諸君を喜ばせてやりませう。……サア二十面相、立つんだ。』

警部はうなだれた怪盜を引立てて、一同に會釋しますと、傍らに佇んでゐた最前の巡査と共に、いそ／＼と階段を降りて行くのでした。

博物館の表門には、十數名の警官が群がつてゐましたが、今しも建物の正面入口から、二十面相の繩尻を取つた中村係長が現れたのを見ますと、先を争つて、その側へ駆寄りました。

『諸君、喜んでくれ給へ。明智君の盡力で、とう／＼こいつを捕へたぞ。これが二十面相の首領だ。』
警部が誇らしげに報告しますと、警官達の間、ドツと鬨の聲が舉りました。

二十面相はみじめでした。流石の怪盜も愈々運のつきと觀念したのか、いつもの圖々しい笑顏を見

せる力もなく、さも神妙にうなだれたまゝ、顔を上げる元氣さへありません。

それから、一同賊を真中に行列を作つて、表門を出ました。門の外は公園の森のやうな樹立です。その樹立の向かふに、二臺の警察自動車が見えます。

『オイ、誰かあの車を一臺、こゝへ呼んでくれ給へ。』

警部の命令に、一人の警官が、帯劍を握つて駆出しました。一同の視線がそのあとを追つて、遙かの自動車に注がれます。

警官達は賊の神妙な様子に安心しきつてゐたのです。中村係長も、つい自動車の方へ氣を取られてゐました。

一刹那、不思議に人々の目が賊を離れたのです。賊にとつては絶好の機會でした。

二十面相は、齒を食ひしばつて、満身の力をこめて、中村警部の握つてゐた繩尻を、パツと振り離しました。

『ウヌ、待てツ。』

警部が叫んで立直つた時には、賊はもう十メートル程向かふを、矢のやうに走つてゐました。後手に繩られたまゝの奇妙な姿が、今にも轉がりさうな恰好で森の中へと飛んで行きます。

森の入口に、散歩の歸らしい十人程の、可愛らしい小學生が、立止つて、この様子を眺めてゐま

した。

二十面相は走りながら、邪魔つけない小僧共がゐるわいと思ひましたが、森へ逃げ込むには、そこを
通らぬわけにはゆきません。

「ア、高の知れた子供達、俺の恐しい顔を見たら、恐をなして逃げ出すにきまつてゐる。もし逃
げなかつたら、蹴散らして通るまでだ。」

賊は咄嗟に思案して、かまはず小學生の群に向かつて突進しました。

ところが、二十面相の思惑はガラリとはづれて、小學生達は、逃げ出すどころか、ワツと叫んで、
賊の方へ飛びかゝつて来たではありませんか。

讀者諸君はもうお分かりでせう。この小學生達は、小林芳雄を團長に頂く、あの
少年探偵團でありました。少年達はもう長い間、博物館のまはりを歩き廻つ
て、何かの時の手助をしようと、手ぐすね引いて待ちかまへてゐたので
した。

まづ先頭の小林少年が、二十面相を目がけて、鐵砲
玉のやうに飛びついて行きました。つゞいて羽
柴壯二少年、次は誰、次は誰と、見る／＼、



賊の上に折り重なつて、兩手の不自由
な相手を、たちまちそこへ轉がして
しまひました。

さすがの二十面相も、いよ／＼
運のつきでした。

「ア、有難う、君たちは勇
敢だねえ。」

駆けつけて来た中村警部
が、少年達にお禮をいつ
て、部下の警官と力を
合はせ、今度こそ取
逃がさぬやうに、
賊を引つ立てて、
ちやうどそこへ
やつて来た警察



自動車の方へ連れて行きました。その時、門内から、黒い背廣の一人の紳士が現れました。騷を知つて、駈け出して来た明智探偵です。小林少年は目早く、先生の無事な姿を見つけますと、驚喜の叫聲を立てて、その側へ駈け寄りました。

『オ、小林君。』

明智探偵も、思はず少年の名を呼んで、両手を広げ、駈け出して来た小林君を、その中に抱きしめました。美しい、誇らしい光景でした。この羨ましい程親密な先生と弟子とは、力を合はせて、遂に怪盗逮捕の目的を達したのです。そして、お互の無事を喜び、苦勞をねぎらひ合つてゐるのです。立並ぶ警官達も、この美しい光景にうたれて、にこやかに、しかし、しんみりした氣持で、二人の様子を眺めてゐました。少年探偵團の十人の小學生は、もう我慢が出来ませんでした。誰が音頭をとるともなく、期せずしてみんなの両手が、高く空に上りました。そして、一同可愛らしい聲を揃へて、繰返しく叫ぶのでした。

『明智先生バンザイ。』

『小林團長バンザイ。』

怪人二十面相 をはり

有共者行發者著は權作著書本

昭和十一年十二月二十四日印
昭和十一年十二月二十九日發
昭和十四年三月八日十八版發行

定價九拾錢

送料(内支地)十二錢
〔關東、關西、關東、關西、關東、關西〕

(怪人二十面相 奥附)

製複許不



著者	江戸川 亂歩
發行者	高木 義賢 東京市小石川區音羽町三丁目十九番地
印刷者	奈良直一 東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷所	株式會社常磐印刷所 東京市小石川區諏訪町五十六番地

本製村志

發行所 東京市小石川區音羽町三丁目十九番地 株式會社 大日本雄辯會講談社
電話(34) 代表 五三〇〇、六一〇〇
牛込 六二〇〇五

(振替口座東京三九三〇番)

妖怪博士 江戸川亂歩著

不可思議な魔法を使つて、國家の大切な機密書類をねらふ妖怪博士を相手に少年探偵團長小林芳雄君が命がけの探偵物語

四六判布装カバー付 定價一圓 送料内、地、支、機、十二錢

少年探偵團 江戸川亂歩著

頭から足の先まで眞黒な怪物を相手に名探偵小林芳雄君が六人の友達を率ゐて、大奮闘つひに怪物を捕へる大冒険讀物。

四六判布装カバー付 定價一圓 送料内、地、支、機、十二錢

まほろし城 高垣 陣著

幕府の隱密木暮月之介が日本を狙ふまほろし武士や幕府を怨んで軍用船を造る眞田幸村などを相手に奮闘する冒険小説！

四六判布装カバー付 定價一圓 送料内、地、支、機、十五錢

少年謎の暗號 森下 雨村著

快活で豪膽な富士夫少年が、日本の大切な秘密を盗まうとする憎むべき外國スパイ團を次々に捕らへる少年探偵物語。

四六判布装カバー付 定價九錢 送料内、地、支、機、十二錢

スパイの女王 野村 胡堂著

百面相のお玉を首領とするスパイ團は、帝都の機密寫眞を仕込んだ指環を手に入れた。この敵を追撃する美少女の探偵物語。

四六判布装カバー付 定價一圓 送料内、地、支、機、九錢

決死の猛獸狩 南洋一 郎著

大狸々を火攻にしたり、人喰虎と一騎打をしたり、巨象と鱷群が大格闘をしたり等、世界で有名な探検家の冒険事實談。

四六判布装カバー付 定價一圓 送料内、地、支、機、十五錢

吼える密林 南洋一 郎著

アフリカ、ボルネオ、マレー半島等の密林中、猛獸を生捕にしたり、毒矢をしかけたり等々、決死の猛獸狩冒険談。

四六判布装カバー付 定價九錢 送料内、地、支、機、十二錢

緑の無人島 南洋一 郎著

日本人一家が絶海の無人島に流れつき、猛獸や、怪土人等と戦ひつゝ萬難を冒して、遂に金の大鑛脈を発見する物語。

四六判布装カバー付 定價一圓 送料内、地、支、機、十二錢

海洋冒険物語 南洋一 郎著

快男兒大助が、北氷洋で大鯨をしとめたり、幽靈船の正體を探つたり、英國の守備隊長を助けたり等、數々の冒険物語。

四六判布装カバー付 定價九錢 送料内、地、支、機、十二錢

日東の冒険王 南洋一 郎著

シヤムの奥地で、剛青年、三吉少年、少女瑠璃子の三人が、怪人ダブラ一味と戦ひ、見事秘密を手に入れる冒険物語。

四六判布装カバー付 定價一圓 送料内、地、支、機、十二錢

吉川英治著

神州天馬俠 後前篇

武田勝頼の一子伊那丸が武田家を再興し、よりと山大名の娘咲耶子と軍師小幡民部の援けを受けて旗擧をする武勇物語！

四六判布装函入
定價各一圓五十錢
送料内、地、支、摩、十五錢

吉川英治著

左近・右近

左近、右近の兄弟が父の志をついで徳川幕府を倒し天皇の御代に返さんと天誅組に加はり正義のために闘ふ愛國物語！

四六判布装カバー付
定價一圓二十錢
送料内、地、支、摩、十二錢

千葉省三著

陸奥の嵐

朝廷の密使として蝦夷族のまつたゞ中へ旅立つ武鷹は、妹と呼ぶ狭霧と苦心慘愴、互に助け合ひ、つひに使命を果す物語！

四六判布装カバー付
定價九 十 錢
送料内、地、支、摩、十二錢

佐藤紅緑著

英雄行進曲 立志篇 出世篇

寛一、光吉、丑太の三少年は『貧乏が何だ！』と奮起し、兄弟の約束をして互に助け合つて輝かしい出世をする物語！

四六判布装カバー付
定價一圓二十錢
送料内、地、支、摩、十五錢

佐藤紅緑著

街の太陽

友達思の岡、信義に厚い馬島、義侠心に富む野宮の三人を繞り事件は次々に展開、決死の友情に亂暴な大崎も改悟する物語

四六判布装カバー付
定價一圓二十錢
送料内、地、支、摩、十二錢

山中峯太郎著

見えない飛行機

姿も見えず音も聞えぬ不思議な飛行機を日本の學者が發明。それを外國の間諜團に奪はれこれを追ふ正雄少年の活躍物語

四六判布装カバー付
定價一 圓
送料内、地、支、摩、十五錢

山中峯太郎著

萬國の王城

大蒙古王國の獨立をはかる怪男兒を助ける日本軍人と、をしく美しい日本少女が一團となつて大沙漠に活躍する物語。

四六判布装カバー付
定價一 圓
送料内、地、支、摩、十五錢

赤川武助著

源吾旅日記

汽車も自動車もない昔、母を訪ねて石見の國から江戸へ江戸から伊豆へ長い旅を續け苦心慘愴遂に母に會ふ源吾旅物語。

四六判布装カバー付
定價一 圓
送料内、地、支、摩、九 錢

大佛次郎著

日本の星之助

海賊に捕らへられた星之助が、遂にそこを逃れ親切の大工父娘や岩太郎老人、強い武士等と力を合はせ海賊共を退治する

四六判布装カバー付
定價一 圓
送料内、地、支、摩、十二錢

久米正雄著

青空に微笑む

志を立てて三宅島を出た雪雄が、被ひかかる幾多の艱難を征服しつつ常に正義を守り、遂に故郷に錦を飾る立志奮闘物語

四六判布装カバー付
定價一 圓
送料内、地、支、摩、十五錢

大場彌平著

われ等の空軍

日本空軍と世界空軍を比べる話、軍用機と民間機の知識、空襲と防空、壮烈な空中戦の話など實に面白い寫眞三百餘枚入

菊判クロス装カバー付
定價 一圓六十錢
送料 内地十錢、
滿、鮮、支、樺、十八錢

平田晋策著

われ等の陸海軍

世界一強い日本の陸海軍について、兵器の話、兵隊の話、軍備の話、作戦の話などを面白く書いた本、寫眞三百餘枚入。

菊判布装カバー付
定價 一圓六十錢
送料 内地十錢、
滿、鮮、支、樺、十八錢

平田晋策著

われ等の海戦史

日本海の大戦の壮烈な話をはじめ、大昔から世界大戦の時までの輝く日本海軍の勝利の歴史と名將や名參謀の逸話など

四六判布装函入
定價 一圓五十錢
送料 内地十錢、
滿、鮮、支、樺、十八錢

教育總監部監修

輝く陸軍將校生徒

幼年學校、豫科士官學校を志望する諸君の爲の親切な手引書、口繪及び寫眞二百餘枚入の美本。

菊判洋装函入
定價 一圓五十錢
送料 内地十錢、
滿、鮮、支、樺、十八錢

武藤貞一著

無敵日本軍

支那事變の爆發から徐州會戦までの皇軍破竹の進撃ぶりや、ソ聯や世界の動きなど書いた本、地圖色刷口繪の寫眞記念帳

菊判洋装カバー付
定價 一圓五十錢
送料 内地十錢、
滿、鮮、支、樺、十八錢

山中峯太郎著

敵中横斷三百里

日露戦役の時、重大任務をおびた我が建川中尉(現中將)以下六勇士が、敵中深く忍び込み悪戦苦闘つひに大武勳をたてる

四六判布装函入
定價 一圓五十錢
送料 内地十錢、
滿、鮮、支、樺、十八錢

山中峯太郎著

大陸非常線

パルチザンや過激派軍の危険極まるシベリヤへわが軍事探偵林聯隊長が乗りこんで縦横無盡の活躍を続ける大手柄冒険記。

四六判布装函入
定價 一圓五十錢
送料 内地十錢、
滿、鮮、支、樺、十八錢

山中峯太郎著

亞細亞の曙

日本征服を企てた憎むべき○國!それを發見した本郷義昭は敢然と○國の根據地に乗りこんだ。目覺しい活躍忠勇物語。

四六判布装函入
定價 一圓五十錢
送料 内地十錢、
滿、鮮、支、樺、十八錢

山中峯太郎著

太陽の凱歌

日本の大切な秘密を盗まんと突然帝都に現れ暗躍を開始した世界間諜團と、日本の日野博士との間に物凄い科學戦が展開

四六判布装カバー付
定價 九十錢
送料 内地十錢、
滿、鮮、支、樺、十二錢

山中峯太郎著

大東の鐵人

滿洲國を覆さうとする、シオン同盟首領バザロフと大興安嶺を死守する劍俠兒本郷義昭以下日本志士の火花を散らす物語

四六判布装カバー付
定價 一圓
送料 内地十錢、
滿、鮮、支、樺、十五錢

池田宣政著
偉人野口英世

貧しい農家に生まれた片端者の少年英世が、あらゆる困難と闘ひ、つひに世界的の大醫學者と仰がれる迄の、奮闘物語。
送料内、地、十、四、錢、
満、鮮、支、樺、十八、錢

池田宣政著

リンカーン物語

木樵の子に生まれたリンカーンが、困苦を忍び、正義のために命をすてて奮闘、つひに大統領に推されるまでの偉人物語。
四六判布装函入
定價 一圓四十錢
送料内、地、十、四、錢、
満、鮮、支、樺、十五、錢

池田宣政著
リビングストーン

アフリカ探検記

英國の偉人リビングストーンが、アフリカの熱地で恐しい猛獸毒蛇と闘ひながら、蠻人を教へ導きつゝ、艱難辛苦の物語。
四六判布装函入
定價 一圓三十錢
送料内、地、十、四、錢、
満、鮮、支、樺、十八、錢

池田宣政著

發明物語
織機王豊田佐吉

貧しい大工の子と生まれた佐吉があらゆる困苦と闘ひ、遂に世界を驚かした自動織機を發明、紡績日本の礎を作つた物語。
四六判布装函入
定價 一圓三十錢
送料内、地、十、四、錢、
満、鮮、支、樺、十八、錢

澤田謙著

プルトーク英雄傳

シーザーやアレキサンダー等の古代ギリシヤ、ローマの十大英傑のお話。ナポレオンもこれを読んで發奮したといはれる。
四六判布装函入
定價 一圓五十錢
送料内、地、十、四、錢、
満、鮮、支、樺、十八、錢

南洋一郎著

ドイツ魂物語
ルツクネル艦長

世界大戦の時、秘密の武装をした小帆船で太平洋大西兩洋を散々暴れ廻つた『海の魔王』ルツクネル艦長の武勇冒險談。
四六判洋装函入
定價 一圓三十錢
送料内、地、十、四、錢、
満、鮮、支、樺、十五、錢

海野十三著

浮かぶ飛行島

日本攻略を目ざす〇國の恐るべき海の魔城!!この秘密を知つた我が川上大尉が杉田水兵と共に飛行島に忍び込む決死小説。
四六判布装函入
定價 一圓三十錢
送料内、地、十、四、錢、
満、鮮、支、樺、十二、錢

平田晋策著

昭和遊撃隊

碧海島に潜む七隻の秘密艦隊昭和遊撃隊が敵の油断を見すまして、次々に大奇襲を試み忽ち味方を勝利に導く大海戦物語。
四六判布装函入
定價 一圓二十錢
送料内、地、十、四、錢、
満、鮮、支、樺、十五、錢

平田晋策著

新戦艦高千穂

北極の秘密境をねらふA、B二國と日本の探検隊、敵は力を合はせ我に戦をいどむ。今こそ世界に誇る新戦艦高千穂の出陣!!
四六判布装カバ付
定價 九 十 錢
送料内、地、十、四、錢、
満、鮮、支、樺、十二、錢

山中峯太郎著

世界無敵彈

世界に誇る無敵彈!!この彈丸の秘密を外國間諜に盗まれた、正雄少年は『見えな飛行機』に乗り敵を追撃し奮戦する。
四六判布装カバ付
定價 一 圓
送料内、地、十、四、錢、
満、鮮、支、樺、十二、錢

池田宣政著
世界名作物語 **あ、無情**
ジャン・バルジャンが、ミリエル司教の慈愛に感激、心から生まれかたつた善人となり神の教に従ひ人の爲に働く物語。
四六判洋装函入 定價 一圓五十錢
送料 内地、十、四錢 滿、鮮、支、樺、十八錢

久米元一著
世界名作物語 **家なき兒**
生まれて間もなく腹黒い叔父の爲に棄子となつた。それからルミ少年はどんな苦しみにも負けず遂に生みの母に會ふ物語
四六判洋装函入 定價 一圓五十錢
送料 内地、十、四錢 滿、鮮、支、樺、十五錢

太田黒克彦著
世界名作物語 **乞食王子**
乞食の子トムが王子様と着物の取替へつこをした爲に、王子の位につかねばらぬといふ一大事！ 世にも不思議な物語。
四六判洋装函入 定價 一圓五十錢
送料 内地、十、四錢 滿、鮮、支、樺、十五錢

佐々木邦著
世界名作物語 **トム・ソウヤーの冒険**
幽霊屋敷の實探しをしたり、無人島を探検したり、悪者の隠れ家へ忍びこんだり洞穴の中から寶物を掘り出す冒険物語。
四六判洋装函入 定價 一圓五十錢
送料 内地、十、四錢 滿、鮮、支、樺、十八錢

水島あやめ著
世界名作物語 **小公女**
題名の示すやうに、小さな王女のやうな心の氣高い行ひの美しいセーラといふ一少女を主人公とした愛と涙の美しい物語
四六判洋装函入 定價 一圓五十錢
送料 内地、十、四錢 滿、鮮、支、樺、十八錢

野村愛正著
世界名作物語 **巖窟王**
ダンテスが悪人共の謀計におちて暗牢に十四年も投げこまれたが、遂に苦心慘愴をぬけ出て悪人共に復讐する物語。
四六判洋装函入 定價 一圓五十錢
送料 内地、十、四錢 滿、鮮、支、樺、十八錢

江戸川亂歩著
世界名作物語 **鐵假面**
プローム要塞に攻入つたモオリスは、裏切者の爲に鐵假面を冠せられ獄中に投ぜられた、その隊長が復讐するお話。
四六判洋装函入 定價 一圓五十錢
送料 内地、十、四錢 滿、鮮、支、樺、十八錢

山中峯太郎著
世界名作物語 **三銃士**
快少年ダルタニアンが命がけの冒険をし國王に謀叛を企てるカルヂナル宰相一味を倒して遂に銃士の頭に推される物語
四六判洋装函入 定價 一圓五十錢
送料 内地、十、四錢 滿、鮮、支、樺、十五錢

高垣 眸著
世界名作物語 **寶島**
寶島の秘圖を握つて探検に出かけるヒスパニヤ號、その船中の陰謀を耳にするジム少年の活躍を描いた冒険物語です。
四六判洋装函入 定價 一圓五十錢
送料 内地、十、四錢 滿、鮮、支、樺、十八錢

南洋一郎著
世界名作物語 **ロビンソン漂流記**
無人島に流れついたロビンソンが、絶望のドン底から奮起し、自ら衣食住を工夫して、冒険奮闘の生活を續ける物語。
四六判洋装函入 定價 一圓五十錢
送料 内地、十、四錢 滿、鮮、支、樺、十八錢

動物物語

大島正滿著

猛獸狩の話、大珊瑚礁や海底の話、鳥や獣の泥棒の話等々珍しい話が澤山。その上鮮明な寫真が二百五十枚もある美本。

四六判布装函入
定價一圓五十錢
送料内、地、十、四、錢

動物奇談

大島正滿著

飛行機からの猛獸境の大探検や猛獸狩、類人猿や火食鳥、海狸の話などの寫真や挿繪を澤山入れて動物界の奇談を集む。

四六判布装函入
定價一圓五十錢
送料内、地、十、四、錢

綴方優良文集

田中豐太郎著

文の作り方や味はひ方について、わかり易い文話を入れ、全国から募集して入選した大臣賞の優秀文を文例としたもの。

四六判布装カバー付
定價一圓二十錢
送料内、地、十、二、錢

少年模範文

八波則吉著

全国から集めた數萬の少年作文の中から、傑作五百を選んで模範例として入れ親切な批評を加へた作文上達の手引書。

四六判洋装カバー付
定價一圓
送料内、地、十、二、錢

少女模範文

友納友次郎著

全国の少女から懸賞募集した作品の中から模範文二百餘篇を選び、文の作り方、味はひ方を指導した作文獨習の好参考書。

四六判ビロード装函入
定價一圓二十錢
送料内、地、十、二、錢



Vertical text impressions on the right page, likely bleed-through from the reverse side.

Top line of faint text impressions on the right page.

Second line of faint text impressions on the right page.

Third line of faint text impressions on the right page.

Fourth line of faint text impressions on the right page.

Fifth line of faint text impressions on the right page.

世界名作物語



罪の世界を脱けて、神のやうな心になつたジャン・バルジャンの愛と正義と勇氣の物語。情深い司教、可憐な少女、熱血の青年、怖しい警視、手に負へぬ無頼漢等が入り亂れて活躍する、世界に於ける名作の物語。

池田宣政先生著 定價一圓五十錢 送料内地十四錢 大日本雄辯會講談社發行

あゝ無情



家なき兒

ルミは生まれて間もなく、腹黒い叔父のために棄子となつた。人生の荒海に投げ出された可憐な少年が或時は大道藝人に賣られ、或は炭坑に生埋にされながらも故郷いづこ、母戀しと旅を續けて歩く、哀なルミの物語。

久米元一先生著 定價一圓五十錢 送料内地十四錢 大日本雄辯會講談社發行



HIDE TSUNE



¥.90

MADE IN NIPPON (JAPAN)

大日本雄辯會講談社發行